

< 2019年2月 >

古賀 順子

「レモンの町マントン」

南仏ニースからイタリア方面に 30km、地中海沿岸のフランス最後の町がマントンである。ニース、モナコ、モンテ・カルロに比べると観光客は少ない。湾に停泊している船も高級クルーザーではなく、小型船。数は少ないが漁船も健在だ。岩盤の上でできた町だけあって、旧市街は坂道、一番高いところに大天使聖ミカエルが町を見下ろしている。17世紀半ばバロック様式建築の教会で、現在は修復中で見学はできない。マントンからはイタリアの湾が望める。国境まで 3km、ヴェンティミリアまで 10km、日常生活にフランス語とイタリア語が共存している。地中海文化と地中海性気候に恵まれた暖かいところで凍ることがない。2月の曇り空のパリから 10度近く暖かいマントン、街路樹として植えられたオレンジの並木に大きな実がなっているのに驚いた。「レモン祭り」(今年は 2/16~3/3の 2週間。第 86回)で知られるマントンは、オレンジ、レモン、柚子など柑橘類栽培の町だと実感する。パリからマントンは 1000km 近く離れており、1時間半の飛行機でニースに降り、ニースからは地中海を見ながらバスで移動した。

ニースの隣町ヴィルフランシュ・シュル・メールには、1957年ジャン・コクトー(1889-1965)がフレスコ画を描いた聖ペテロ礼拝堂がある。そこからほど近いサン・ジャン・カップ・フェラには、同じくコクトーがフレスコ画を描いた「サント・ソスピーール邸」(現在修復中)や「エフリュッシュ・ド・ロスチャイルド邸」があり、青く輝く地中海を望むことができる。

エズ、モナコ、モンテ・カルロを過ぎるとマントン手前のロックブリュヌ・カップ・マルタンに入る。1951年ル・コルビュジエが建てた木造 15m²の「小屋」が海を見晴らすところにある。人のサイズを考慮したコルビュジエのモデュールを始めとする彼の建築概念を要約し、晩年 13年間、毎夏を過ごした小さな別荘小屋だ。

そこからマントンまで 10分。町の中心にある市役所の一角に「結婚式の部屋」がある。1957年から 1958年にかけてコクトーが絵を描き、椅子、照明、鏡、絨毯をデザインした空間だ。パリでの執筆活動に疲れたコクトーはマントンで休養し、マントン市民のために結婚式の間を飾った。正面にはマントン女性の被り物を付けた娘と漁師の帽子を被った若者が描かれている。若者の眼は魚で、マントン市の旗の色である「白と青」、マントンの太陽とレモンの色「黄色」が使われている。左右の壁には「想像の町での結婚の図」と「オルフェウスとエウリュディケ(ギリシア神話)」の物語が描かれている。結婚式場に相応しい赤いビロード張りの椅子、ヒョウ柄の絨毯、鏡に描いた「マリアンヌ(フランス共和国のシンボルである女性)」、天井画など部屋全体をデザインしている。現在もマントン市民の結婚式が執り行われ、2€で一般にも公開している。

マントンはコクトー所縁の地で、海のすぐ側には「ジャン・コクトー美術館」がある。スイスの高級腕時計ブランド「コルム(CORUM)」の社長を務めたベルギー系アメリカ人セヴラン・ワンダーマンは、コクトー愛好家でもあり、マントン市に個人コレクション 1800点(内コクトーの作品約 1000点)を寄贈した。絵画、デッサン、パステル、リトグラフ、陶器、織物、宝石、書籍、写真などで構成される貴重なコクトー・コレクションだ。ワンダーマンのコレクションを中心に成り立っている市立美術館だが、不幸なことに、昨年 2018年 10月末の悪天候で建物が大波を被ってしまった。数十点に及ぶ作品も浸水の被害を受け、現在、建物修復のため美術館は閉まっている。再開の目処はまだ立っておらず、来春を目指して修復しているが、国が認める自然災害の対象から外れ、市の財源だけでは苦しいそうだ。

マントンの春を告げる「レモン祭り」に多くの人が集まり、町の復興に役立ってくれることを願っている。「マントン・レモン」と称するには無農薬栽培の義務があり、ジャムや塩漬け、ケーキやお菓子を始め、「リモンチェッロ」と呼ばれるレモンのリキュールも有名だ。イタリアに近いこともあり、パスタ、海産物は美味しく、老後を過ごす人が多いのも納得できる。